

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小沢哲史

本論文は、人間の自他理解や情動理解に関わる社会的参照(social referencing)という現象の起源を、養育者の能動的な役割という観点から解明しようとした発達心理学的研究である。本論文は、大きく3つの部分から成る。第1部の前半は、従来の社会的参照研究を、実証主義的観点から概観している。ここでは、従来のおびただしい数の研究が、理論的に整理されておらず、データからの結論もまちまちであり、その結果、従来の乳児の発達の特性を中心とする理論的観点と方法では、乳児が真に自律的に社会的参照を行い得ているのかという点を明らかにすることは困難であることを指摘している。第1部の後半は、視点を転じ、養育者が乳児の自律性を引き出す能動的行動を重視し、新たな理論的枠組みを提示している。第2部においては、第1部の議論に基づき、「自律促進傾向」という養育者の特徴を質問紙によって測定した。さらに、養育者が乳児の行動を自律的な社会的参照とみなしやすいかどうかを評価し、両者の関係を検討した。第3部では、乳児の自律的な社会的参照の個人差を測定し、第2部において測定した養育者の「自律促進傾向」が、自律的な社会的参照にどのような影響を及ぼしているかを検討している。

まず、第1部では社会的参照の概念の定義から始まる。社会的参照とは、主体が葛藤あるいは混乱を喚起された時に、主体がとっさに他者をふりかえって、他者の情動的情報を探り(情報探索)、その情動的情報を活用して、主体が対象に対する自らの情動や行動を調整する現象である(情動調整/行動調整)。言い替えれば、社会的参照とは、“自律的”な情動理解と言える。

しかし、従来の研究では、この自律性の捉え方にあいまいさがあった。従来の研究において、情動調整や行動調整が概して見い出されやすいのは、他者(特に養育者)が表情、音声、しぐさなどを交えて多重に働きかけた場合であり、この場合、他者が乳児の情動感染力や模倣能力や注意に訴える形で様々な誘導を行いうる結果、乳児に自律性は要求されない。逆に、他者の情報を表情のみとした場合には、乳児が情報を取るためには、自律的に他者の顔をふりかえる必要がある。こうした手続きを採った場合、概して情動調整や行動調整が得られにくいことが知られている。かといって、後者の結果を受けて、乳児に社会的参照がないのかと言えば、そうとも言い切れない。この時期のコミュニケーションにおいて、養育者が、音声を含めずに働きかけること自体、生態学的妥当性を欠いているという可能性もあるからである。社会的参照研究において、ひとつの障壁となっているのが、この自律性をめぐる問題である。

そこで、論文執筆者は、いったん日常現象としての社会的参照に視点を転じ、そこに養育者が大きく関わっている可能性を見い出した。ある現象を解明する上で、軽視されてきた要因に目を向けること自体は別段驚くべきことではないが、本論文が評価される点は、乳児の社会的参照の本質としての自律性に対応する形で、養育者側に「自律促進傾向」という心理的特徴を仮定し、これが乳児の個々のふるまいへの直感的評価(実体としての乳児の能力に関わらずより自律的に評価すること)およびふるまいの質(より乳児自身の自律的対処を促すと共に、乳児の未熟な部分に焦点化して補うこと)を規定し、その蓄積が乳児の社会的参照(自律的情動理解)の個人差を規定するという理論モデルを提示したことにある。

第2部では、まず、養育者の特徴としての「自律促進傾向」を質問紙において測定している。直接参考のできる先行研究がなかったため、新たに質問紙が作成された。乳児の依存性(未熟さ)に対する2種類の不快感(即時に表出可能なものと表出困難なもの)を指標として各3項目計6項目を、99名の養

育者(子は、言語的なコミュニケーションが活発になる直前の19カ月児)に対して問うた。回答結果を数量化3類によって分析したところ、ほぼ予想された形で2つの相関軸が得られ、第1相関軸(表出困難)を「自律期待(依存への否定的感情)」, 第2相関軸(表出可能)を「自律的養育への構え」と命名した。

その一方で、養育者が自分の子をより自律的にみなすかどうかを情報探索評価(社会的参照開始時点としてのふりかえり行動を情報探索行動とみなすかどうか)という形で測定した。従来、養育実践において個々の乳児の行動をどのように評価している(みなしている)かどうかは、その重要性が認識されながらも(Miller, 1995), 実証的に測定することが難しかった。そこで本論文では、個々の乳児の葛藤・混乱に基づくふりかえり行動を録画し、その再生画面上で、母親に自由に評価させるという手法を採った。その自由回答から、ふりかえり行動を情報探索行動とみなしているものを“情報探索評価”とし、養育者ごとに、情報探索評価があったか無かったか(有無)を基準変数とし、質問紙から得られた養育者ごとの得点を説明変数としてロジスティック回帰を行った。その結果、自律期待スコアと情報探索評価の有無の間に統計学的に有意な関連が得られ、養育者は、その自律期待が強いほど、情報探索評価を行いやすいことが明らかにされた。この第2部で得られたデータは、実証方法に種々の工夫が見られ、この種のテーマにおける従来のデータのほとんどが数名に対する観察から得られていることに比べて、データ収集に注がれた努力が評価される。

第3部では、従来、群間差(平均値の比較)という形でだけ検討されてきた社会的参照の情動調整および行動調整を初めて個人単位で測定し、第2部において得られた養育者の自律促進傾向が現実に乳児の社会的参照を規定しているのかどうかを検討された。従来の研究と異なり、本論文では、刺激に対して社会的参照への動機付けを有したとみなしうる葛藤・混乱状態を生じた試行のみを対象として個々の乳児において情動調整・行動調整を測定した。なお、ここでは、乳児の自律的な社会的参照を測定するため、養育者の情報は表情のみとし、協力者を2群に分けて、肯定表情を与える群と否定表情を与える群とした。結果、否定表情を与える群において、自律期待スコアの高い養育者を持った乳児ほど情動調整を示しやすいことが明らかにされた。

本論文は、実証的な裏づけが不十分であるままに頓挫しようとしていた社会的参照研究に、新たな理論的枠組みと新たな実証手段を持ち込み、独自作成した質問紙の信頼性などの粗雑な点を残しつつも、養育者のあり方が乳児の社会的参照を規定する所までを検証した。本論文では、すでに述べた実証的工夫の他に、コードレスイヤホンを利用した教示や複数のリモコンカメラの利用、母子に対する社会的配慮など、従来の研究の限界を越える創意工夫がなされており、観察や傍証に頼りがちな乳児の社会性発達の分野において一定の貢献をしたものとして評価された。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

なお、本論文の第1部の一部は展望論文として「心理学研究, 71巻」に、第1部および第2部の実証データを含む一部は「心理学評論, 44巻」に、また第2部の異なる実証データを含む一部は「理論心理学研究, 3巻」に、いずれも厳正な審査を経て掲載された。